新刊・寸感

相澤 正夫

『シリーズ日本語史1 音韻史』

高山倫明・木部暢子・松森晋弥子・早田輝洋・前田広幸著
岩波書店
二〇一六年一月刊
定価四四〇〇円（税別）

新企画「シリーズ日本語史」全四巻のトップを切って「第四巻 日本語史のインタフェース」が刊行されたのは、二〇〇八年七月のことである。「日本語の歴史に新たな視点で迫るシリーズ」と謳い、看板に偽りなしの新鮮な内容だった。早速本欄で取り上げ（二〇〇八年一一月号）、続く「第一巻 音韻史」「第二巻 語彙史」「第三巻 文法史」の充実と早期刊行を期待したいと書き添えた。

結局、全四巻が出揃うまでに八年近くかかった。ずいぶん待った気もするが、新しい枠組みの中で音韻を扱う本書が刊行されたことを、この分野に連なる研究者としてまずは喜びたい。「国語学における資料研究・記述的研究の遺産を継承し、そこに言語理論の光を当て、新時代の日本語史を幅広い読者に提供する」（「シリーズ日本語史」の広告文）という決して易しいとは言えない課題への回答が、具体的な形で示されているからである。

全七章を五人の著者が分担して執筆するが、それぞれ適任の章で存分に蘊蓄を傾けている印象だ。章立てと執筆者は、次のとおりである。①音声学と音韻論（高山）、②文献学（高山）、③音韻史（高山）、④アクセント史（木部）、⑤比較方法・言語類型論による接近法（松森）、⑥生成音韻論による接近法（早田）、⑦最適性理論・他の理論による接近法（前田）。

概略、①②が入門的な基礎知識の提供、③④が従来の国語学の研究成果の紹介、⑤⑥⑦が特定の言語理論を踏まえた新たな接近法の解説といった内容である。国語史と言語史の接続・融合を図り、個別と普遍の間の健全な往復運動を実践しようとする姿勢が、どの章を見ても強く感じられる。「新時代の日本語音韻史」は単なる掛け声に止まっていない。

拾い読みには適さない本だと判断して、①から⑦まで順番にじっくり読み通してみた。山登りに喩えると、五合目くらいまでは緩やかな坂道が続くが、それを過ぎると一気に勾配は急になり、最後は胸突き八丁が待ち構えている、そんな感じである。①②の入門的な書きぶりから、例えば⑤⑥⑦の専門的な書きぶりのハードルの高さを想像するのは難しい。「幅広い読者に提供する」という試みの実際上の困難さを、改めて実感させられることになった。

『図説 日本語の歴史』

今野真二著
河出書房新社（ふくろうの本）
二〇一五年一一月刊
定価二〇〇〇円（税別）

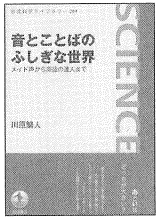
前の本は言うまでもない。手堅い言語史研究の背後には、具体的な文献資料（記録・文書）が控えている。分かってはいても、研究書や解説書の活字化されたテクストに慣れ親しんでしまうと、ついつい忘れてしまいがちのことではある。

文献資料のプロは別として、周辺の研究者にとって、資料そのものの姿に触れる機会は決して多くない。とはいえ文献は具体的なモノとして存在するから、図版（写真）はそれをイメージする手段としてきわめて有効である。展覧会に行けなくとも、お土産の図録をたよりに展示物をイメージできるのと同じである。

本書は、奈良時代から明治・大正時代までの「日本語の歴史」の叙述に重要な位置を占める文献資料群の「図録」に当たるものである。「展示」の総括責任者たる著者は、三世紀の「魏志倭人伝」から一九一五年発表の芥川龍之介『羅生門』まで、「奈良」一〇点、「平安」一三点、「鎌倉・室町」一四点、「江戸」一四点、「明治・大正」一五点の計六六点を精選し、見開き二ページで解説している。

よく見ると、著者略歴のあとに「本書中、所蔵を記していない図版は著者蔵」との注記がある。早速、冒頭から図版をチェックしてみて驚いた。江戸時代以降の大半は著者今野氏の所蔵本（コレクション）だったのである。

『音とことばのふしぎな世界 ―メイド声から英語の達人まで』



川原繁人著
岩波書店（岩波科学ライブラリー）
二〇一五年一二月刊
定価一二〇〇円（税別）

ことばと音声にまつわる身近な話題から入って、「調音音声学、音響音声学、知覚音声学」の勘所をさらりと軽やかに、しかし独自の科学の視点を交えながら解説し、その勢いで社会との接点にも目を向け「福祉音声学」（著者の造語）へと話を進める。これで百ページである。

音声学への入門を「音象徴」から始めるところがユニークだ。しかし、よく考えれば自然な導入で、通常の入門書の裏をかくセンスに驚かされた。メイド声を扱うからといって、奇をてらっているわけではない。ふしぎを見逃さない著者の嗅覚が、分け隔てなく科学の対象として取り上げただけのことである。

何となく文系的な限界のなかで音声学を捉えているアタマには、目覚ましのコーヒーのような一冊である。文系とか理系とか勝手に引いた国境線はやすやすと越えて、オンラインサイトも縦横に活用しながら、議論の本質的な部分を伝えるべく最大限の工夫がこらされている。

実は、日本語音韻史のエピソードも登場する。有名な「母には二たび会ひたれども…」のなぞなぞ（室町時代）から昔のハ行音をいきなりP音と推定したり、ジョアン・ロドリゲスをオランダ人の宣教師としたりするのは、ご愛敬である。補足や修正をすればすむことで、本書の持ち味はもちろん別のところにある。

（あいざわ・まさお 国立国語研究所）